

はじめに

この「社会学概論」は、現代に至る社会学の基本的な考え方や基礎となる知識を、さまざまな分野の全体にわたって鳥瞰し、簡潔に説明したものである。社会学は、家族、都市、農村、地域などの調査対象となる事象の形態や、法、宗教、教育、経済、犯罪、文化、知識などの研究主題の領域を表現する単語を被せて「〇〇社会学」として専門的に展開してきたという歴史をもつ。しかしながら、そうした諸領域を貫いて「社会とは何か」「人は社会的なるものをどう論じてきたのか」という問いが、学ぼうとする者の想像力の原点にある。この書物は、その基礎をあらためて概説するものである。

日本の社会学において『社会学概論』の名を冠した本は、1922年に岩波書店から刊行された高田保馬の書物が最初かもしれない。それ以降、さまざまな社会学者がこの名のもとでの要説を試みてきた。「大学双書」の一冊としてまとめられた本間康平ほか編『社会学概論——社会・文化・人間の総合理論』（有斐閣、1976年）は、1970～80年代に社会学を学ぶ者には必携の一冊で、本書の執筆者のなかにもまた、この本に学んで学部の講義内容を理解し、大学院受験の勉強をした思い出をもつ者がある。

しかしながら、社会の現代的な変貌とともに、社会学の理論や実践もまた多様に拡がり、私たちは新たな「鳥の目」（全体を広範囲に見わたすこと）の地図と見知らぬ「地を歩く経験」（現実を知ること）のガイドとを必要としている。

この書物はコンパクトだが、新しい社会学の入門書であり、それぞれの論者の個性を活かした概説の試みである。

2025年1月

佐藤 健二

目次

はじめに i

序章 社会学の誕生と展開 1

オーギュスト・コント (1) デュルケムとヴェーバー (2)
社会調査の伝統とアメリカ社会学 (3) 社会学的想像力と
社会調査 (5) 一杯のコーヒー (6) 何のための社会学か (8)
社会学は何を明らかにするのか (9) 社会学は何の役に立つか
(10)

第1章 個人と社会 13

出発点としての個人と行為 (13) 行為の意味を理解する：理解
社会学 (14) 行為における合理性 (16) 合理的選択と効用
(17) 合理的な意思決定者は利己主義者か？ (18) 秩序の問題
(20) 社会化と社会統制 (21) ミクロな行為からマクロ
な社会現象へ (22) 社会現象とモデル (25) 合理的な行為
はよい社会をもたらすか？ (28) 個人から社会へ，社会から個人へ
(30)

第2章 自己と他者 35

親密圏と役割取得 (36) 現象学的社会学とシンボリック相互作用論
(39) 印象管理 (42) さまざまな「アイデンティティ」
(44) 社会的パーソナリティ (46) 物語としての自己とライ

第3章 家族と親密圏

51

「想像の共同体」と「想像の親密圏」(51) 家族の歴史性もしくは親密圏の構造転換(52) 「親密圏」という集まりの事実(53) 近代家族論と「家族の戦後体制」(55) 近代家族論以降の多様化(57) 家族生活の周期の複線性(59) 生命再生産の問題系(60) 人間社会における身体の再生産(62) コミュニ論の補助線：相剋性と相乗性(64) 交響圏とルール圏(66) 親密なる他者のあらわれ方の差異(67) 「交響圏」を要素とする「ルール圏」(69)

第4章 仕事と産業

73

社会学における仕事(73) 科学的管理法と人間関係論(74) 生産様式の変化：フォーディズムとポストフォーディズム(77) 消費と労働(79) 社会に埋め込まれる仕事(80) 働くことの多様性と仕事の外部(82) 日本的雇用慣行の成立とその特徴(83) 日本的雇用慣行への批判(85)

第5章 病と医療

91

病・医療・社会(91) 役割としての病人(92) 病の経験と相互作用(94) 医療専門職が果たす役割(96) 病や健康をめぐる認識の変化(100) 病や健康の社会的決定(101) 社会のなかの身体(103)

第6章 福祉と貧困

107

福祉とは何か (107) 福祉と生存権 (108) 福祉に反する状態 (109) 絶対貧困と相対貧困 (111) 相対的剝奪としての貧困 (112) 相対貧困率の国際比較 (113) 障害とフレイル (114) ケアの社会学 (116) 福祉のための社会政策 (118) 所得保障 (119) 社会サービス (120) 市民権の発達 (122) 福祉レジーム (123) 福祉の社会的分業と社会的包摂 (124)

第7章 犯罪と逸脱

127

犯罪学以前 (128) デュルケムと『自殺論』 (129) マーソンの緊張理論 (130) 学習理論 (132) 社会的コントロール理論 (134) レイベリングという視点 (135) 社会問題の構築主義 (137) 犯罪化と医療化 (139) 全制的施設と生権力 (141) ライフコース犯罪学 (144) 地域レベルで犯罪をとらえる (145)

第8章 グローバル化と開発

149

国民国家と国際化 (149) 国際化からグローバル化へ (151) グローバル化の進展 (152) グローバル化と開発途上国 (153) グローバル資本主義 (155) グローバル文化 (157) 自由貿易と環境問題 (159) グローバル化と労働問題 (161) 労働条件の規制緩和 (162) 脱グローバル化? (163)

第9章 メディアと文化

167

概念としての「メディア」「文化」(167) マスコミュニケーションの歴史的な発見(168) 一方向性・直線性の超克(169) 内容分析とコーディング(172) データの質を活かす(173) 「疑似空間」と第一次世界大戦(175) 「メディア」への注目(177) 人間の拡張/社会の構築(180) 「文化とはなにか」という問いかけの畏(181) 価値ある高さ/残余の領域/科学と哲学(182) 自文化中心主義と文化相対主義(183) 文化の公共性(184) 文化の身体性(185)

第10章 社会階層と不平等

189

均質でない社会(189) 結果の不平等：所得格差とジニ係数(190) 機会の不平等と社会移動(192) 社会移動と教育：OEDトライアングル(193) 階級と社会階層をめぐって(1)マルクス(194) 階級と社会階層をめぐって(2)ヴェーバー(195) 階級と社会階層をめぐって(3)ブルデュー(195) 「能力」による支配？(197) 現代日本における学歴と収入(198) 背景としての教育拡大(198) 出身階層による“教育格差”(200) 文化資本と“再生産”(201) 教育における階層差をどう説明するか(203) 社会階層をどう切り分けるか(203) 職業による階層分類の限界と課題(204) 社会移動は活発か？(207) “移動のしやすさ”は平等か？(209) 社会移動と機会の平等(209) 階層研究の広がり(210)

第11章 ジェンダー

213

社会によって構築される性(213) ジェンダーとセックス(215) セクシュアリティ(218) 仕事とジェンダー(220) 家事・育児・介護とジェンダー(224) フェミニズムが提示したこと(226)

第12章 都市・地域

231

空間と社会の関係：スラムとシカゴ学派（232） アーバニズム（233） コミュニティ（235） 町内会，コミュニティ，ソーシャル・キャピタル（237） 都市と農村（239） 政治経済学的視点：新都市社会学（240） 都市を動かす権力と開発（242） 資本による空間変容（243） ハウジング：「住む」ことの見えづらさ（245） 都市と社会的排除（247） 近隣効果：都市空間の「真の」効果？（249）

第13章 権力と自由

253

行為は制約されている（253） 権力と自発性（254） 正当性への信念と支配形態（255） 合法的支配の究極としての官僚制（256） 現代社会と法の役割（258） 社会と刑罰（259） 日本人は裁判嫌いか？（261） 法・道徳・社会規範（262） アドルフ・アイヒマン（263） 権威への服従：ミルグラムの実験（264） 服従と不服従との間（266） 社会における行為と自由主義（266） 私たちはどこまで自由か（268）

終章 方法としての社会学

271

観察・調査と社会学の方法（271） 社会の観察と社会学の誕生（274） 日本における社会調査法の展開（276） 「方法」を問うという課題（277） 「代表性」概念の濫用（278） 質問紙調査の「革命」（280） 質問紙調査の「弱点」（282） 質問紙調査以外の手法について（283） 「理論的対象」と認識生産のプロセス（285） 対象としての社会と方法としての社会（287）

あとがき 291

索引 294

オーギュスト・コント

ブラジルは世界有数のサッカー強豪国として広く知られる。そのため FIFA（国際サッカー連盟）ワールドカップなどの国際舞台で、ブラジル国旗を目にすることが多い。その国旗は、緑色の背景に黄色の菱形、そして中央には青い天球儀を配した独特のデザインである。その青い天球儀を横切る白い横断幕にはポルトガル語で「ORDEM E PROGRESSO」と緑色の文字が刻まれている。この言葉は「秩序と進歩」を意味し、フランスの哲学者 A. コントの思想に由来する。コントはフランス革命後の混乱を背景に秩序ある進歩を求めたのであるが、ブラジル共和国の建国者たちも帝政から共和制への平和的な移行を望み、コントのこの思想に共鳴したのである。

社会学概論の冒頭がサッカーの強豪ブラジルから始まるのは、ほかでもない、ブラジル国旗に遺言を遺したコントその人が、社会学という言葉を広めた人でもあったからである。社会学はフランス語では *sociologie*。socio はラテン語のソキウス (*socius*) に由来し、logie はギリシャ語のロゴス (*λόγος*) に由来する。ソキウスは仲間や友のことを意味し、ロゴスは理性を意味する。コントはソキウス、さらには人間社会全般に関する学という意味で、社会学という言葉を使った。このため日本でも社会学は、当初、世態学と呼ばれた。世態とは世間という意味であり、国家権力に拠らない人びとの集まりのことを指している。

コントは大著『実証哲学講義』（1830～42年）を著し、三状態の法

則（三段階の法則ともいう）を提唱した。彼によると、人間の知識は神学的段階、形而上学的段階、実証的段階という3つの段階を経て進化する。世界のできごとは、神学的段階では靈魂や神の意志によって説明され、形而上学的段階では抽象的な概念によって説明されるが、実証的段階に至ると実験や観察に基づいて説明される、とコントは考えた。また彼は、学問の最も基礎的な部分を数学とし、研究の対象が複雑さを増すにつれて、それを扱う学問が天文学、物理学、化学、生物学と積み重なり、最終的には、人間社会の法則を探求する学問としての社会学に到達すると主張した。

社会学という言葉を考案したという意味で、コントは社会学の創始者であったのだが、その後の歴史のなかで、コントの著作が社会学の古典として読み継がれることは少なかった。社会学者の清水幾太郎が指摘しているように、「(コントは)社会学という学問では、経済学でアダム・スミスが占めているのと同じ地位を占めている」。しかし経済学の方法および内容が著しく変化しているにもかかわらず、「アダム・スミスの地位が依然として不動である」のと、コントの地位は対照的である（清水幾太郎，1995、『オーギュスト・コント 社会学とは何か』岩波新書，2頁，128頁）。

デュルケムと ヴェーバー

社会学の「創始者」コントに代わって、社会学の歴史のなかで大きな理論的影響を及ぼし続けたのは、E. デュルケムと M. ヴェーバーである。彼らの著作は、現在でも社会学の学びを始める学生にとっての必読書となっている。また専門的な社会学者のなかにも、ヴェーバーやデュルケムの学説研究を専攻している者が現在でも少なくない。

デュルケムは、社会学の研究手法として「社会的事実を物のごとく扱う」というアプローチを提唱し、それに基づいて多くの研究を行った。彼の代表作『自殺論』（1897年）は、自殺という現象を自

殺率の比較という観点から分析した研究として知られる。デュルケムは、集団ごとの自殺率の違いが、個人の生理的または心理的な状態の差異によって生じるのではなく、個人が所属する集団がもっている「個人の自殺を抑制する力」の強さの違いによって生じることを明らかにした。この結論に、個人を超えた社会的要因を探求する学問としての社会学の特徴が表れている。今日、日常語としても使われるようになったアノミー（無規範状態）という概念は、デュルケムの研究活動から生まれた。

ヴェーバーは、社会現象における人間の「主観的に思念された意味」に注目する独自の方法論を用いて、多大な研究業績を残した。現在でも広く読まれている『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（1904～05年）で、ヴェーバーは資本主義の成立と発展のためには、勤勉による富の形成を重視する「資本主義の精神」を人びとが内面化する必要があることを指摘し、この「精神」がプロテスタンティズムの宗教的倫理、とりわけカルヴァン派の禁欲倫理と深く結びついていることを明らかにした。今日、日常語としても使われるカリスマの概念は、ヴェーバーの政治的支配に関する研究から生まれた。また、^{りなんげい}理念型や価値自由（没価値性）といった研究方法も、ヴェーバーの社会学的探求から生まれた。

社会調査の伝統と アメリカ社会学

デュルケムとヴェーバーが、今日の社会学理論にとっての古典であることは多くの社会学者の間で合意されている。他方、社会学には理論的な研究と並んで、社会調査と呼ばれる、経験的（empirical）な研究（理論ではなく、経験したり観察したりしたものに基づく研究）の伝統もある。

社会学史のなかで指摘されることは少ないが、イギリスにおけるブルーブック・ソシオロジーの伝統も、社会調査の源流の1つと言ってよいだろう。ブルーブック（表紙が青かった）とはイギリスの議

会における社会問題に関する報告書であり、貧困、労働環境、教育といった当時の社会問題を取り上げていた。K. マルクスも『資本論』（1867～94年）を執筆するにあたり、これらの報告書を参照している。

20世紀初頭のアメリカで活躍したシカゴ学派と呼ばれる都市社会学者たちの研究方法も、社会調査の歴史のなかで重要な役割を果たした（経済学の分野にもシカゴ学派と呼ばれる新自由主義的な経済学者たちがいるが、これとは別である）。当時のシカゴは急速な工業化と移民の流入によって、文化的摩擦をはじめ、貧困、犯罪、住宅問題などさまざまな社会問題が発生していた。主としてシカゴ大学に拠点をもつ社会学者たちが、そうした都市問題（都市の社会問題）の調査と研究に従事し、その解決を求めた。彼らが用いたエスノグラフィー、ケーススタディ、インタビューなどは、後の社会調査の方法に大きな足跡を残した。

社会学の源流はデュルケムやヴェーバーなど19世紀の産業革命後のヨーロッパにあったと言えるが、他方で、学問としての社会学が現在のような形になるうえで重要な役割を果たしたのは、20世紀のアメリカであった。移民社会アメリカは、日々、社会問題と格闘しなければならなかったため、ヨーロッパや日本に比べて社会学者の数が圧倒的に多かった。これが1つの理由である。

また、デュルケムやヴェーバーの社会学理論と経験的研究との総合をはかる動きが20世紀のアメリカで見られた。T. パーソンズは、一見反するように見えるデュルケムとヴェーバーの理論が、じつは2人とも社会的行為の**主意主義**（人間の行為を意図や目的と規範とのかかわりのなかでとらえようとする考え方）の立場に立ち、共通していると主張した。また R. K. マートンは（コントのようなグランドセオリーではなく）**中範囲の理論**の確立を提唱して、理論的研究と経験的研究を架橋した。

20世紀アメリカのパーソンズやマートンらによって、19世紀ヨーロッパのデュルケムとヴェーバーの仕事に改めて社会学の古典としての地位が与えられ、これらと経験的社会学（社会調査の伝統）とを結びつけることで、現在の社会学の原型が作りあげられた。

日本の場合、近代化や産業化が欧米諸国より遅れたこともあり、社会学が現実的な学問となるには時間がかかった。社会学は、輸入学問として、大学での講義が明治時代に始まっていたが、コントやスペンサーの学説を紹介することをもって、社会学とされる時代が続いた。そうしたなかで有賀喜左衛門や鈴木榮太郎による農村研究、戸田貞三による家族研究など日本社会に対する経験的研究も現れるようになった。とはいえ、日本の社会学が現在のようなかたちをとるようになるのは、第二次世界大戦後の米軍占領下において、アメリカ社会学が導入されたことの影響が大きい。日本で、アメリカ社会学が定着するうえでは、清水幾太郎・日高六郎・福武直・高橋徹などの影響が大きかった。

社会学的想像力と 社会調査

法律学を学ぶということは、六法全書の法律の条文を暗記することではなく、リーガルマインド（法学的な思考法や応用力）を身につけることだと、よく言われる。この言い方を参考にすると、社会学を学ぶということは、社会現象について博覧強記になることではなく、社会学的想像力を身につけることだといえる。

社会学的想像力とは、純粋に個人的だと思われる事柄と社会的な出来事とのつながりについて想像を働かせる力であり、アメリカの社会学者 C. W. ミルズによって提唱された思考法である。彼は、同名の著書のなかで、この概念を次のように説明している。

「人々は普通、……自分たちひとりひとりの生活パターンと世界史の流れとの間に複雑なつながりがあることにほとんど気

づかない。両者のつながりは、人々がどんな人間になってゆくか、そしてどんな歴史形成に参加することになるかということに対して何かしらの意味をもっている。……個人的なトラブルにうまく対処するには、その背後でひそかに進行している構造的転換をコントロールする必要がある。」(ミルズ, C. W., 2017, 『社会学的想像力』伊奈正人・中村好孝訳, ちくま学芸文庫, 1章)

「人々が必要としているもの、あるいは必要だと感じているものとは、一方で、世界でいま何が起きているのかを、他方で、彼ら自身のなかで何が起こりうるのかを、わかりやすく概観できるように情報を使いこなし、判断力を磨く手助けをしてくれるような思考力である。こうした力こそが、……社会学的想像力とでも呼ぶべきものである。」(同前)

純粹に個人的だと思われる受験、就職、恋愛、結婚、出産、育児、養育……などのライフイベントも、じつは深いところで歴史のうねりとつながっている。たとえば高度経済成長期の就職と就職氷河期の就職とでは、就職のあり方が根本的に異なっている。失恋や離婚も個人的な選択の結果と思われて、じつはマクロの社会変動のジグソーパズルのなかの1つのピースであるかもしれない。

一杯のコーヒー

現代人は、朝起きて眠気を覚ますために、あるいは、ランチやディナーの食後に^{たしな}コーヒーや紅茶を嗜むことを習慣としている。コーヒーを飲むことによって、気持ちを引き締めたり、気分転換をすることができる。この何気ない行為に社会学的想像力を働かせると、何が明らかになるだろうか。社会学者のA. ギデンズは、ある社会学の教科書のなかで、「コーヒーを飲むという単純な行為」に社会学的想像力を働かすことのようなことがわかると説明している(ギデンズ, A., 2009, 『社会学 [第五版]』松尾精文ほか訳, 而立書房, 4-6頁)。

(1) コーヒーには、日々の社会活動を構成する象徴的な価値がある。コーヒーを飲むという儀式は、単にコーヒーを消費するという以上に重要な意味を持ちうる。日本語でも「お茶をする」というとき、それは単にコーヒーや紅茶を飲むためではなく、相手とおしゃべりをするためであろう。

(2) コーヒーにはカフェインが含まれている。カフェインは頭をスッキリさせることのできるドラッグであり、多くの人は気分を高揚させるために、コーヒーを飲む。多くの社会でコカインやヘロインが禁止されているのとは異なり（→第7章）、カフェインはアルコールと同様に社会的に受け入れられている。

(3) コーヒーを飲むことによって、私たちは好むと好まざるとにかくかわらず、この惑星に広がる複雑な社会経済的関係のなかに巻き込まれる。コーヒーの消費の多くは先進国でなされるが、コーヒー豆の生産の大部分は劣悪な労働条件の下、グローバルサウス（→第8章）で行われる。児童労働や奴隷労働が用いられる例もある。

(4) コーヒーを飲むということは「自然な」行為ではなく、過去の社会的・政治的・経済的な歴史を前提としている（→第8章）。中東が原産地であるコーヒーが世界中に広まったのは、西欧の植民地拡大の結果であり、現在のコーヒーの生産も南米やアフリカなどかつての西欧植民地で行われている。

(5) 国際的なフェアトレード、人権、環境危機に関する論争のなかで、コーヒーはブランディングされ、政治化される。フェアトレードのコーヒーを飲むことは、ライフスタイルの選択だけでなく、政治的な意味を持つ。

このように、普段何気なく飲んでいる一杯のコーヒーの背後には、地球的（グローバルな）規模の歴史と地理が横たわっている。

社会学的想像力を駆使して、いかに重要な事柄が示されたとしても、それが根拠（エビデンス）のないものであったら意味がない。他者からは単なる妄想と思われるかもしれない。自然科学では、主として、実験や観察の結果によって、仮説が検証されたり反証されたりする（現在ではコンピュータによるシミュレーション【→第1章】という方法もある）。これに対して社会学でエビデンスとなるのは、多くの場合、社会調査である（もちろん実験が行われることもある。シミュレーションも有望な方法ではある）。社会学を学ぶということは、社会学的想像力を身につけるということに加えて、社会調査の方法を身につけることでもある。

社会調査の方法を身につけるというのは、調査を設計して実施するということもさることながら、調査の結果得られたデータを正しく読み取る方法を身につけるということでもある。なお社会調査の意義や歴史については終章で取り上げる。

何のための社会学か

学問は何のためにあるのか、というのはそれぞれの学問に共通する重要な問いである。古くからその答えとして指摘されてきたのは、真理の探究である。人間には生まれながらにして知的好奇心が備わっており、未知の事柄に出会うと、それを詳しく知り、理解したいと願う性質がある。知るという営みは、英語の5W1Hという表現に要約することができるだろう。すなわち「いつ」「どこで」「誰が」「何を」「なぜ」「どのように」という問いに答えを見出すことが、何かを「知る」ということである。社会学もまた社会に関することがらを「知る」ための学問であると言えるだろう。

学問の存在理由の説明として、もう1つ重要な方法は、その学問が何の役に立つのか、すなわち学問の効用を明らかにすることである。ただし、この視点は「知る」という営みに比べると従属的なものと言える。なぜなら、人間社会にとって一見役に立たないと考え

られていたものが、後になって思いがけない形で役に立つことが、科学の歴史においてしばしば見られてきたからである。「役に立つから正しい」というわけではなく、「正しいから役に立つ」とも言えるのであるが、他方で、後世から見て正しくないと言われるものが一時的に役に立った例も歴史のなかには存在する。そのため、これらの点には慎重な姿勢が求められる。

それでは、社会学は、社会に関することからを知るために、何を明らかにするのであろうか。

**社会学は何を明らかに
するのか**

1つは、人びとが自明であって疑いようもないと考えているものが、実はそうではないということを明らかにすることである。

日常性の批判と言ってよいかもしれない。現象学的社会学ではエポケーともいう。

たとえば、日本人は、日本社会のなかで生きているから、日本社会のことは知っていると考えがちである。しかし、日本社会の外で育った人から見ると、不思議に見えることが多々ある。『WHY JAPANESE PEOPLE!』というテレビの人気番組のなかで、アメリカ人のタレント厚切りジェイソンは、日本人がいかに不可解であるかを強調する。しかし社会学は、日本人が当たり前だと思っていることだけでなく、日米両国人が共通して当たり前と思っていることをも相対化する。

さらに、日米両国に限らず、人間社会に共通することからについても、それが錯覚である可能性を問い直す。社会の外側に出て、社会を突き放してみる「メタの視点」に立つことによって、現代人にとっての自明性を突き崩すのである。人びとは自由に振る舞っているように見えて、実は個人を超えた構造によって支配されているかもしれない。おそらく、ヴェーバーによって研究されるまで、プロテスタントは、自分たちの職業倫理が資本主義の精神と親和的であ

ることには気づいていなかったであろう。

社会学が明らかにするもう1つは、専門家の知識が人びとの日常生活から遊離していることもありうるということである。たとえば、法社会学や医療社会学は、法律が、人びとの日常生活からかけ離れていることや、医療が患者の日常生活の質を改善しないこともありうるということを示唆する(→第5章)。社会学は、専門家に対する素人の視点を、専門家にも理解可能なかたちで提示する役割を果たす。ただし、そうなってくると、社会学も特権的な地位にとどまることはできず、社会学を批判的に検討する「自己反省の社会学」(A. グールドナー)や「社会学の社会学」(P. ブルデュー)が必要となってくる。

哲学者 F. ベーコンも指摘したように、知ることは、力の源である (knowing is power)。知識は、権力にもつながるが、反対に、抑圧からの解放にもつながる。

社会学は何の役に立つか

最後に、社会学は何の役に立つのだろうか。個人的な水準でいえば、それまで知らなかったことを知ることによって、日常生活における意思決定、またライフコースの岐路における重大な選択に役立てることができるだろう。たとえば、雇用慣行の変化(→第4章)についての知識は、就職活動の役に立つはずだ。

また、マクロの水準でみると、社会学は社会の再帰性の一環として機能することで、社会の役に立っている。英語の授業で再帰代名詞を習ったことを思い出してほしい。I に対する myself, you に対する yourself などである。日本語で「私は楽しい」は、英語では、I enjoy myself となる。I という主語に対して自分が目的語になるときに再帰代名詞の myself を使う。要するに、行為の主体が自分を行為の対象とすることで、再び主体に帰ってくることが再帰的ということである。

これを社会に当てはめると、社会がみずからの情報を大量に入手し、これらをもとに、社会の制度や構造を変えていくことが再帰的ということである。たとえば、日本の1970年代では55歳定年制が一般的であったが、社会科学や自然科学の知識（そのなかにはライフコース、家族、労働などに関する社会学の知識も含まれる）の増大によって（→第3章、第4章、第5章）、21世紀の現在では65歳までの雇用保障が法律によって義務化されている（70歳までの雇用保障も努力義務となっている）。この変化は、社会が自身の構造や制度を観察・評価し、それに基づいて自己を変革した結果であると言えるが、社会学もこのプロセスのなかで重要な役割を果たしているのである。

社会学部や社会学科を設置している日本の大学は少なくない。ところが、高等学校では社会学で扱う内容が、「公共」をはじめとする公民科の科目のなかで分散的に扱われるものの、社会学という名称の科目は置かれていない（アメリカやイギリスでは高校の科目のなかに社会学が存在する）。このため大学進学や入学後の一般教育科目の選択において、社会学とはどのような学問か戸惑うことがあるかもしれない。本書によって、そのような疑問が払拭されることを期待したい。また社会学について漠然としたイメージを抱いていたひとにとっては、そのイメージを具体化し、社会学への理解を深めるきっかけとなることを望む。



読書案内 ● ●

E. デュルケーム『自殺論』（宮島喬訳）中公文庫、2018年（原著1987）。

社会現象としての自殺を社会的要因によって、自己本位的自殺、集団本位的自殺、アノミー的自殺などに類型化した社会学の古典的名著。

M. ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（大塚久雄訳）岩波文庫，1989年（原著1904～05）。

営利の追求を敵視するプロテスタントの禁欲倫理が，逆説的なことに近代資本主義の成立と発展に寄与したことを明らかにした社会学の古典的名著。

あとがき

本書は社会学の入門書をめざしている。最初この企画が持ち上がったのは、2016年ころだったと思う。有斐閣の松井智恵子さんからの話では、アルマ・シリーズの「Interest=教養科目として学ぶ人に」のなかの一冊として、社会学の概要がわかる教科書をつくりたいとのことだった。どの本だったかは忘れてしまったのだが、すでに絶版になっている有斐閣刊の社会学の教科書がそのとき示され、これが手本だとも言われた。ある経営学者がその本を、社会学以外の人間が社会学の概要を知るうえで非常に良い本だと高く評価していたからだということだった。

要するに、本書の想定読者は、初めて社会学を学ぶ学生と、社会学以外の専門家として企画されたのであった。

当時、同僚だった佐藤健二さんと相談のうえ、松井さんからの提案を引き受けることにした。最初は軽く考えていて、武岡暢さんと米澤旦さんにも加わってもらい、編者4人で章立てを考え、あとは若手研究者に各章を分担執筆してもらおうつもりでいた。ところが有斐閣編集部としては、共著のほうが望ましいということで（経験上の智恵のようだ）、4人の年齢バランスも考えて、常松淳さんにも加わってもらい、5人で全ページを執筆するという方針が変わった。また担当編集者に堀奈美子さんも加わった。

全体の章構成と執筆分担は2016年の段階で決まっていたのだが、その後の編集会議は紆余曲折があった。対面での編集会議を重ねるうちに、各章の内容は次第に具体化してきたのだが、コロナ禍もあり、編集会議はしばし中断した。編者がそれぞれ就職したり、転職したり、退職したりすることが続いた、といった事情もあった。ポストコロナの時代となって、会議が遠隔（オンライン）で再開され

ることになるのだが、初稿を執筆したころと世界の情勢は大きく変わっていたため各章は大幅なアップデートが必要となった。

私が担当したグローバル化の章でいうと、2016年には、ブレグジット（英国のEU離脱）とトランプ氏の大統領当選があり、グローバル化が減速する可能性を指摘していたのだが、編集会議の席では、ブレグジットはともかく、トランプ氏当選はそれほど重要ではなからうとの意見も出た。トランプ氏は2020年にはグローバル化推進者のバイデン氏に大統領選挙で負けるのだが、2024年秋に再選を果たし、2025年1月から大統領職に就いた。グローバル化に関しても、従来とはまったく異なる政策が実行されることが予想される。

社会学は社会学者の数だけある、否、それ以上ある、と自虐的に語られることがある。これは社会学の学問としての未熟さを語ったものとして受け取られることが多い。とはいえ、その良し悪しは別として、世にある社会学の教科書の多くの扱っている内容が似通っているというのも事実である。家族やジェンダーや階級・階層や都市を扱わない教科書はない。社会学とは社会学とは何かを探究する学問だと言われることもあるが、社会学とは何かを追究すると、おのずと共通するカテゴリーに到達するということでもあるのだろう。その意味では、社会学者のあいだに一定の共通認識が成立していると言えるかもしれない。

私が大学院生のとき、ある経済学の先生から、社会学は学会で教科書（有斐閣双書）を作っているんだね、と驚かれたことがあった。経済学では学会編（ということは学会公認）の教科書というのは当時ありえなかったらしい。

とはいえ、社会学が一つだとしても——そこまで言えず、もう少し控えめに、社会学は社会学者の数ほどはないにしても——その語り口は社会学者の数ほどあるとは言えるかもしれない。本書も、章によって文体や書きぶりが異なっていることに、読者はすぐに気づ

くであろう。執筆者による用語法も章によって異なっている場合がある。1人で書いた教科書ではないので、やむをえないことなのだが、これを各章が分裂しているというのではなく交響していると受け止めてくれるならば幸いである。

2025年1月

武川 正吾

索引

●事項索引●

◆あ行

愛 64
ICF（国際生活機能分類） 115
ICT（情報通信技術） 158
アイデンティティ 44, 45
IとMe 37
アクティブ・オーディエンス 171
アソシエーション 65, 236
集まりの構造 62
アノミー 3, 130, 132
アーバニズム 234
アンダークラス 113
イエ 239
育児休業制度 57
生ける法 262
意思決定 17
逸脱 22, 100, 127, 128
一般化された他者 38
移動体通信 179
移民 150
移民労働者 161
医療化 100, 140
医療社会学 92, 94
医療専門職 96, 98
医療における社会学 102
医療についての社会学 101
印象管理 43
インセスト・タブー 63
インターセクショナルリティ →交差性
インターネット調査 285
インタビュー 4
インターフェース 180

インフォームドコンセント 97
インフォームドチョイス 97
ウェストファリア体制 149
埋め込み 80
AR（拡張現実） 186
エージェント・ベスト・モデル 25
SSM調査 200, 204, 207
SDGs（持続可能な開発目標） 112, 155, 163
エスニシティ 150, 228
エスノグラフィー 4
エスノメソドロロジー 41
エートス 47
エポケー 9
LGBTQ+ 219
エレファント・カーブ 154
エンゲル係数 60
エンコーディング 172
エンジェル係数 60
OEDトライアングル 193, 197
オイルショック 155
応報主義 259
表局域／裏局域 44
オリエンタリズム 182

◆か行

階級 190, 196
介護保険 120
階層帰属意識 206
階層構造 207
開発 242

- 科学的管理法 75
 課業 (タスク) 75
 核家族 52, 55
 格差 190
 学習理論 134
 獲得的地位 197
 学歴主義 197
 隠れたカリキュラム 217
 カースト制 189
 「火星人の襲来」 170
 家族社会学 59
 家族周期論 60
 家族主義 125
 価値合理的行為 16
 価値自由 3
 GAFA 159
 カリスマ 3
 カリスマの支配 256
 カルチュラル・スタディーズ 183
 環境問題 29, 159
 観察 184
 監視医学 101
 慣習 30
 慣習法 258
 感情的行為 16
 感情労働 82, 118
 官僚制 256
 危害原理 267
 機会の平等 192
 機会の不平等 210
 疑似環境 175, 176
 規則 257
 機能障害 (インペアメント) 115
 規範 128
 客我 (Me) 37
 逆機能 257
 キャピタル・フライト 153, 162
 教育 193, 216
 教育機会の拡大 198
 行政村／自然村 239
 共有地の悲劇 29
 規律 256
 儀礼的無関心 43
 均衡 25
 近代家族 52, 56
 近代家族論 51, 55, 57
 近代化理論 154
 近代社会 149
 近代世界システム 151
 緊張理論 131
 近隣効果 249
 クィア 219
 グラウンデッド・セオリー・アプローチ
 チ 94
 グリーフ 63
 クレーム申し立て活動 137, 138
 グローカル化 159
 グローバル化 113, 151
 グローバルガバナンス 161, 163
 グローバル企業 → 多国籍企業
 グローバル・ケア・チェーン 157,
 226
 グローバルサウス 7, 155, 159
 グローバル文化 157
 訓練された無能力 257
 ケア 110, 117
 ケアの社会化 225
 ケアの倫理 118
 ケア流出 157
 ケアリング 118
 ケア労働 225
 ケアワーク 157
 経営者 75
 経済人 18

- 経済政策 109
 刑罰 22, 140, 259
 刑法 259
 計量テキスト分析 175
 ケーススタディ 4
 ゲゼルシャフト 69, 236
 結果 15
 結果の不平等 190, 192
 ゲマインシャフト 69, 236
 ゲーム理論 18
 権威主義的パーソナリティ 46, 177, 266
 原因 15
 限界集落 240
 現金給付 114
 健康で文化的な最低限度の生活 108
 現象学的社会学 39
 現物給付 117
 権力 254
 行為 253
 行為者 13
 行為主体 13
 交響圏 66, 68, 69
 公共圏 37, 56, 65, 70
 公共圏／親密圏の構造転換 184
 公共財 19
 公共政策 109
 公共性の構造転換 52
 拘禁刑 260
 交差性（インターセクショナルリティ） 228
 工場法 119
 更生 260
 構造移動 207
 構築主義 41, 51, 100, 137, 138, 215, 273
 公的年金 119
 公的扶助 110, 120
 行動 14
 行動経済学 19
 高度経済成長 155
 合法的支配 256
 効用 18
 合理的選択理論 17
 合理的配慮 121
 国際障害分類 115
 国民皆保険 102
 国民国家論 51, 149
 ゴシップ 181
 誇示的消費（見せびらかしの消費） 79
 50歳時未婚率 57
 個人 13
 固定電話 179
 コーディング 173, 174
 孤独な群衆 169
 子ども・子育て支援制度 121
 子どもの貧困 59, 114
 コミュニケーションの二段の流れ 171
 コミュニティ 235, 236
 コミュニティとしての企業 84
 根拠（エビデンス） 8
 コンテンツ 169, 174
 ◆さ行
 再帰性 10
 罪刑法定主義 259
 再生産労働 224
 財政福祉 124
 搾取 195
 サード・プレイス 238
 サプライチェーン 152

- 産業社会 149
- サンクション →制裁
- ジェンダー 125, 206, 215
—の社会化 216
- ジェンダー・アイデンティティ 216
- ジェンダー・イデオロギー 55
- ジェンダー格差 221, 224
- ジェントリフィケーション 243
- シカゴ学派 4, 131, 233, 240, 275
- 資源 111
- 自己 37
- 自己成就の予言 23
- 仕事 73
- 市場 80
- 自然状態 20
- 自然的態度 39
- 自然法 258
- 失業 110
- 実験 19
- 実証主義 274
- 実定法 258
- 疾病構造の変化 115
- 質問紙調査 280
- 私的年金 119
- 視点 15
- 児童虐待 58
- ジニ係数 190
- 支配 255
- 自文化中心主義 183
- 資本家 75
- 資本主義 3, 74
- シミュレーション 8, 23, 248
- 市民権 (シティズンシップ) 122
- 社会移動 192
- 社会移動表 207
- 社会化 21, 31
- 社会階層 190
- 社会解体 131
- 社会学 1, 2, 11
方法としての— 287
- 社会学的想像力 5, 167
- 社会関係資本 (ソーシャル・キャピタル) 83, 102, 145, 196, 202, 206, 237, 238
- 社会規制 119
- 社会規範 30, 263
- 社会心理学 19
- 社会政策 109, 118
- 社会調査 3, 8, 49, 131, 275, 276
- 社会調査法 276
- 社会手当 118
- 社会的企業 83
- 社会的行為 15, 16
- 社会的コントロール理論 134
- 社会的自己論 37
- 社会的事実 30
- 社会的ジレンマ 28, 223
- 社会的選好 19
- 社会的地位 197
- 社会的排除 126, 140
- 社会的パーソナリティ 46
- 社会的不利 (ハンディキャップ) 115
- 社会的包摂 126
- 社会統制 21
- 社会ネットワーク分析 81
- 社会の階層 (化) 189
- 社会の原形質 54
- 社会保障 109
- 社会民主主義レジーム 124
- シャドウワーク 56, 82
- 主意主義 4
- 就業率 73

集合表象	167		人口変動	64
自由主義	267		新自由主義	→ネオリベラリズム
自由主義レジーム	124		心性 (マンタリテ)	47
従属理論	154		身体	103
住宅政策	110		身体の再生産	62
集団	14		新都市社会学	241
柔軟な専門家	78		新聞データベース	173
修復的司法	260		シンボリック相互作用論	40
自由貿易	150		親密圏	36, 37, 52, 56, 65, 70, 71
重要な他者	37		スタグフレーション	155
受益圏・受苦圏	243		スティグマ	120, 136
主観的	15		ステレオタイプ	177, 213
主権	149		スラム	132, 232
主権国家	150		生活構造論	60
出身階層	192		生活困窮者自立支援制度	120
循環移動	208		生活の質 (QOL)	98, 117
障害	110, 114, 228		正義の倫理	118
障害学	115		生権力	101, 143
障害者差別解消法	121		制裁 (サンクション)	22, 259
障害者総合支援法	121		生殖家族	59
障害の社会モデル	115		生殖テクノロジー	63
状況	266		生成 AI	88
消極的自由	266		生存権	108
消費社会	79		制定法	258
情報の流れの一方方向性	169		性的指向	219
剰余価値	195		正当性	256
職域福祉	124		成文法	258
職住分離	56		性別違和	216
所得再分配	110		性別職域分離	223
所得保障	110		性別役割分業	52, 56, 220, 224
ジョブ型雇用	84		生命の再生産	60
自律性	31		生命倫理	105
人格	13		世界都市 (グローバル都市)	151
新型コロナウイルス	92, 152, 164		セクシュアリティ	218
シングル	58		セグリゲーション	→分離
神経科学	268		世帯	206
人口転換	56		世代間社会移動	193, 203, 207, 209

- 世代内社会移動 192
- 積極的自由 268
- 積極的労働市場政策 87
- セックス 215
- 絶対貧困 111, 155
- 選好 17
- 全制的施設 142
- 専門家 10
- 専門家支配 97
- 粗移動 207
- 層 189
- 相互行為 117
- 相互作用 94
- 相乗性／相克性 66
- 想像の共同体 51, 52, 157, 180
- 相対的剝奪としての貧困 112
- 相対貧困 112
- 相対貧困率 113
- 創発 23
- 属性的・生得的地位 197
- 組織 14, 74
- ソーシャル・キャピタル →社会関係資本
- ◆た行
- 第一次集団 22, 236
- 第一次貧困 111
- 大学進学率 198
- 第三空間 238
- 第二次集団 22
- 代表性 278
- 多国籍企業（グローバル企業） 151, 153, 159, 244
- 他者 38
- ただ乗り（フリーライド） 19
- 脱家族化 125
- タックスヘイブン 153
- 脱グローバル化 164
- 脱商品化 123
- 弾丸理論 169
- 男女雇用機会均等法 57
- 男性学 228
- 地域 232
- 小さな政府 122
- 中産階級 195
- 中絶 64
- 中範囲の理論 4
- 調査 184, 271
- 町内会 237
- 沈黙の螺旋 171
- 創られた伝統 181
- 定位家族 59
- ディコーディング 172
- 底辺への競争 162
- テキストマイニング 172, 175
- データの質 174
- 伝統的行為 16
- 伝統的支配 256
- 討議 184
- 統計的差別 223
- 同心円モデル 234
- 到達階層 193
- 道徳 30
- 党派 195
- 都市 231
- 都市への権利 244
- ドメスティックバイオレンス 58
- ドラッグ 7
- トランスジェンダー 216
- トランプ政権 165
- ◆な行
- 内発的発展 184
- 内面化 21

- 内容分析 172, 174
 南北問題 154
 ニクソン・ショック 155
 二重構造 84
 日本的雇用慣行 83, 85, 223
 人間関係論 (学派) 76
 ネオリベラリズム (新自由主義)
 155, 159
 ネットワーク分析 25
 脳死 104
 農村 239
 能力 197
 能力障害 (ディスアビリティ) 115
 ノーワーク・ノーペイの原則 123
- ◆は 行**
 ハウジング 245-247
 パノプティコン 142
 ハビトゥス 31, 196
 パラサイトシングル 60
 バリアフリー 115
 晩婚化 58
 犯罪 22, 127, 128, 259
 被害者なき—— 136
 犯罪化 139, 140, 261
 犯罪学 129
 判例法 258
 非行 144
 非正規雇用 57, 113, 206, 221
 非正規労働者 85
 非-犯罪化 139
 ピープルズ・チョイス 171
 標準家族 55
 表象 241
 病人役割論 92, 94
 貧困 4, 59
 貧困線 111
 貧困の女性化 113
 VR (仮想現実) 186
 フィールドワーク 95, 184
 フェアトレード 7
 フェミニズム 226
 フォーディズム 77
 福祉 107
 狭義の—— 107
 広義の—— 108
 ——の社会的分業 124
 福祉国家 122
 規制国家としての—— 122
 給付国家としての—— 122
 国家目標としての—— 122
 福祉国家レジーム 123, 126
 福祉サービス 107
 福祉三法 109
 福祉多元主義 125
 福祉レジーム 125, 126
 福祉六法 109
 二つの文化 183
 不払い労働 →シャドウワーク
 不平等 189
 不文法 258
 フランクフルト学派 47
 ブランディング 7
 フリーアクセス 102
 フリーライダー 20
 フリーライド →ただ乗り
 ブルーカラー 204
 ブルジョワジー 194
 フレイル 116
 プレカリアート 113, 206
 プレグジット 161
 プレトンウッズ体制 155
 プロレタリアート 194
 文化 181

文化産業 159
文化資本 196, 202, 206
文化相対主義 183, 184
文化的再生産論 202
分化的接触理論 132
紛争 261
分離 (セグリゲーション) 23, 248
ベヴァリッジ報告 109
ベーシック・インカム 120
ペット 63
ペットロス 63
偏見 177, 213
保育 62
法 30
法意識 261
法実証主義 258
法的パターンリズム 267
法的モラリズム 267
法の支配 258
保守主義レジーム 124
ポストフォーディズム 78
ホーソン実験 76
ホワイトカラー 204
ホワイトカラー犯罪 133
本質主義 40

◆ま行

マクドナルド化 80, 158
マスコミュニケーション 169
マスメディア 168
未婚化 58
身分 195
身分制 189
ミーンズテスト 120
無業 110
ムラ 239
メッセージ 169

メディア 167
メディア論 178
メリトクラシー 197
メンバーシップ型雇用 84
目的合理的行為 16
目標の転移 258
モデル 24
モノカルチャー化 153
モビリティ 246

◆や行

役割 38
役割距離 43
役割取得 38
夜警国家 122
ヤングケアラー 59
誘因 29
ユートピア論 66
抑止 260
世論 168
世論調査 168
弱い紐帯 81

◆ら行

ライフコース 118, 144
ライフコース犯罪学 145
ライフステージ 59
ライフヒストリー 49
ラディカルフェミニズム 227
ランダムサンプリング 276, 279
利己主義 18
利他主義 19
理念型 3, 16
リベラルフェミニズム 226
リーマン・ショック 164
流出率 209
流動性 193

流入率 209
ルサンチマン 161
ルール 128
ルール圏 66, 68, 69
レイベリング論 135, 137, 138
労働者 75
労働者派遣法 162

労働法 75
労働問題 159, 161

◆わ行

ワーキングプア 86, 113
ワークライフバランス 224
割れ窓理論 145

●人名索引●

◆あ行

アイヒマン, A. 263
アドルノ, T. 46, 159
アリエス, P. 47
有賀喜左衛門 5
アルチュセール, L. 175, 287
アーレント, H. 264
アンダーソン, B. 51, 157, 180
磯村英一 238
ウィークス, J. 218
ウィレンスキー, H. 123
上野千鶴子 117
ヴェーパー, M. 2, 3, 15, 16, 47, 73,
195, 233, 254-256, 274
ヴェブレン, S. 79
ウォーラステイン, I. 151
ウルストンクラフト, M. 226
エスピン＝アンデルセン, G. 123,
125
オークレー, A. 224
落合恵美子 56
オリバー, M. 115
オルデンバーグ, R. 238

◆か行

カステル, M. 240, 250, 285
ガリレイ, G. 127

川島武直 261
カンター, R. M. 220
キツセ, J. 137
ギデンズ, A. 6, 36
ギリガン, C. 118
グラノベッター, M. 81
クーリー, C. H. 236
グールドナー, A. 10
グレイザー, B. 94
ゴフマン, E. 42-45, 136, 142
ゴールドソープ, J. H. 204
コント, A. 1, 2, 233, 273, 276
コンラッド, P. 100

◆さ行

齋藤純一 70
サザランド, E. H. 132, 133
サッセン, S. 244
サン＝シモン, C. H. 274
サンブソン, R. 145, 146
シェリング, T. C. 23, 248
清水幾太郎 2, 5
シャー, E. M. 136
シュナイダー, J. W. 100
ジンメル, G. 234, 274
末廣昭 156
スコット, W. R. 74

鈴木榮太郎 5, 239, 276
ストーファー, S. 275
ストラウス, A. 94
ズナニエッキ, F. W. 275
スノー, C. P. 183
スペクター, M. 137
スペンサー, H. 233, 276
セネット, R. 78
セーブル, C. F. 78

◆た 行

タウンゼント, P. 112
高橋徹 5
建部遜吾 276
タルド, G. 129
ティトマス, R. 104, 124
デイビス, G. F. 74
テイラー, F. 75, 76
デカルト, R. 35
デュルケム, E. 2, 3, 30, 73, 129,
274
テンニース, F. 236
ドーア, R. 84
戸田貞三 5, 276
トーマス, W. I. 275
外山正一 276

◆な 行

ノエル-ノイマン, E. 171

◆は 行

パーク, R. E. 233, 275
ハーシ, T. 134
バージェス, E. 234, 275
パーソンズ, T. 4, 21, 92
パットナム, R. D. 83
ハーディン, G. 29

ハバーマス, J. 36, 52, 184-186
バーリン, I. 266, 268
パール, R. 241
ピオーリ, M. J. 78
日高六郎 5
フォード, H. 77
福武直 5, 276
フーコー, M. 101, 142, 218, 255
ブース, C. 274
フリーダン, B. 227
フリードソン, E. 96-98
ブルデュー, P. 10, 31, 195, 196,
202, 271, 272
ブルーマー, H. 40
ブレイヴァマン, H. 78
ブレヒト, B. 127
フロイト, S. 35
フロム, E. 46, 177
ベーコン, F. 10
ベッカー, H. S. 135
ベンサム, J. 142
ボーヴォワール, S. 215, 227
ホックシールド, A. 82, 224
ホップズ, T. 20, 21
ボードリヤール, J. 79
ポランニー, K. 80
ホール, S. 172

◆ま 行

マクルーハン, M. 178
マーシャル, T. H. 122
マッキーヴァー, R. M. 236
松原岩五郎 274
マートン, R. K. 4, 23, 131, 132,
257
マルクス, K. 4, 172, 194
見田宗介 65-67, 69

ミード, G.H. 37, 38, 45
ミラノヴィッチ, B. 154
ミル, J.S. 267
ミルグラム, S. 264, 266
ミルズ, C.W. 5
ムーア, R. 246
メイヨー, E. 75, 76

◆や 行

安田三郎 276
ヤング, M. 197
横山源之助 275

◆ら 行

ラウブ, J. 145

ラザースフェルド, P. 171
ランドバーク, G.A. 282
リースマン, D. 46, 169, 186
リッツァ, G. 79, 158
リップマン, W. 175, 176
リントン, R. 197
ルフエーブル, H. 241, 244
ルーマン, N. 52
レックス, J. 246
ロウントリー, B.S. 59
ロバートソン, R. 159
ロンブローゾ, C. 129

◆わ 行

ワース, L. 231, 240, 275

【有斐閣アルマ】

社会学概論——何をどのように考えてきたのか

Introduction to Sociology

2025年3月10日 初版第1刷発行

著者 武川正吾・佐藤健二・常松淳・武岡暢・米澤亘

発行者 江草貞治

発行所 株式会社有斐閣

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-17

<https://www.yuhikaku.co.jp/>

装丁 デザイン集合ゼブラ+坂井哲也

印刷 大日本法令印刷株式会社

製本 大口製本印刷株式会社

装丁印刷 株式会社亨有堂印刷所

落丁・乱丁本はお取替えいたします。定価はカバーに表示してあります。

©2025, Shogo Takegawa, Kenji Sato, Jun Tsunematsu, Toru Takeoka, Akira Yonezawa.

Printed in Japan. ISBN 978-4-641-22242-7

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

JCOPY 本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、(一社)出版者著作権管理機構(電話03-5244-5088, FAX 03-5244-5089, e-mail:info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。